

宮内 洋

MIYAUCHI Hiroshi

体験と経験の  
フィールドワーク

北大路書房

## はじめに

私は、三つの異なる修士論文を書くという体験をしている。高等教育機関の世界に通じておられる方ならば想像されるかもしれないが、所属する大学院や研究室を三度移ったわけではない。これは同一の大学院、しかも同一の講座においての体験である。

本書は、フィールドワーク<sup>(1)</sup>・質的調査に関する書物であるが、世に多く出版されているフィールドワークや質的調査や社会調査に関する書物とはやや異なる点があるかもしれない。そうであるならば、それは、そのような私の珍しい体験に由来しているのかもしれない。

この点に関して、少し具体的に述べたい。まず、最初の修士論文を提出したのは私が修士課程二年時のことだった。大学院においては基本的に修士課程は二年間であり、その最終年に修士論文を提出して、その内容に基づき、修士号が授与されるか否かが決定される。国内の大学院においては一般的なこのようなプロセスを経ることが多い。私の場合は、当時の指導教官（当時は国立大学であったので、そういう呼称であった）が非常に忙しいという理由で受理していただけなかった。たしかに、講座の主任教授が病に倒れて、十数人の学生の卒業論文、海外から留学されていた博士課程の大学院生の博士論文、修士四年目と三年目を迎えた各々の大学院生の修士論文を、私の指導教官であった方がたった一人で抱えておられて、修士二年目の私などは出る幕もないといった感じであった（しかも、社会科学系の大学院生が修士論文をわずか二年で書き上げるなどということはあり得ないといった当該研究科の社会科学系独自のムードもあった）。結果的に私は修士課程には三年間在籍することになり、最初の修士論文は破棄し、全面的に書き直すこととした。二年間いただいていた奨学金も切れてしまい、毎日の生活を送るのは非常に苦しかった。朝の四時に起床し、バイトを行なうなど、毎日の生活がのんびりと過ごせるというわけではなかった。しかし、現在から見れば、良い経験をさせていただいたと感じている。正直に述べると、もしあのまま順調に二年で修士課程を修了していたらと思うと、少し怖くもある。これらの経験で学んだことはあまりにも多いが、一つ目の修士論文を受理されなかったという点に限ると、い

から修士論文であっても自らが書いたものが読まれるということとはまったく前提にはならないということであった。「何だろう、少しだけ手にとってみようか」と思っていただけなのか。私は、そのことをまず考えるようになった（そのことによつて、拙稿のタイトルが「論文らしくない」という弊害が生じてしまいはしたが）。

二つ目の修士論文は、大学および講座に提出することなく、自分自身で封印した。私は、「在日朝鮮人」<sup>(2)</sup>女性の生活史の聞き取り調査を行なっており、中野卓氏の生活史研究（中野一九七七など）を中心に参照しながら、その完成を目論んでいた。しかし、それはかなわなかった。完成した原稿を聞き取り調査に協力してくださった各々の人たちに見ていただいた。その行為には、誤解や間違いのないようという思いがあった。被調査者の方々に直接確認をしていただき、正確を期したいという思いが強かった。被調査者の生活世界にさらに深く迫らなければならない、そして、さらに「厚い記述 (thick description)」<sup>(3)</sup> (Geertz 1973) を行なわなければならないといった強迫観念にとらわれていたのかもしれない。結果、このことによつて、私は厳しいクレイムを受けた。修士課程三年目で追い詰められていた私也是非常戸惑った。そして、これ以上留年することはできなかった。もう研究をやめるか否かということを考え始めた。この当時の私は、本当に自らのことしか考えていなかったと、今にしてみると思える。まったく余裕がなかった。まったく余裕がなくなっていた。その当時の私自身の混乱ぶりをよく表わしていると思われるフィールドノーツ（フィールドワークの記録）の一部を引用しておく。

Z市の公共施設で開催されている共生をテーマとした写真展の会場でAさんと待ち合わせた。彼女は、20分ほど遅れてやって来た。末っ子の子とも一緒だった。少し展示を見てから、彼女は隣の公共施設の喫茶店に

行こうと言った。そこで話すからと言った。僕はさらに詳しい生活史を話してくれるのだろうかと勝手に期待していた。今から考えれば、彼女はきつちりと話をつけようと決意していたのだろう。展示場では、彼女は在日関係の本と、「ムックリ」<sup>(5)</sup>を買っていた。

喫茶店の席に着くと、彼女は子どもに別の席に着くように頼んだ。大切な話し合いがあるからと彼女は言った。先日渡していた、僕が書いた彼女の生活史をカバンから取り出すと、「これはまた続くの？」と尋ねた。僕はまだ続くし、これはまた途中だと答えた。

彼女は、単刀直入に言っね、と前置きしてから、これを全部白紙に戻してもらえないかと言った。彼女は、自分の人生をこのような生活史にまとめられることを「拒否したい」と強い口調で言った。僕はそのとき頭がかなり混乱したが、とにかく彼女の話を聞くように努めた。しかし、僕の一年間がすべて形として蓄すことができなくなってしまうから、その動揺は隠せなかつたと思う。

彼女は実際に僕の書いたものを読んでみて、僕と彼女自身の向いている方向が違うことに気づいたというのだ。最初、彼女は僕とあまりそれほど親しくはない時期に、自分についての話をした。(…中略…)彼女は人前で話すのは苦手だし、講演をして歩いているわけではないから、僕のような人間の方が多くの人たちに在日について代弁してくれるという計算が働いたのだというのだ。彼女にとつて僕は代弁者だったのだ。僕は代弁者であることを否定した。いくら話を聞いても当事者にはなれないからと。僕はこの日本社会で起こっていることを説明できる人間でありたいと話した。

彼女の言う、向いている方向が違うという意味が、僕にはわからないでいた。彼女は、「X+Xは1とかじゃないのよ」と何度も言った。自分の人生は化学変化みたいにはならないと言っただ。僕には最初から図式があって、彼女の人生をそれに当てはめているように感じたようだ。彼女は、私という「標本」によって在日すべては語れないのよ、と言った。彼女の言う通りだと思った。生活史に書かれてある「注記」などを読む

と、そのように受け取られても仕方ないし、僕の記述の仕方が実際にそうになっている。

一体宮内くんは何がしたいのか、と彼女は問う。僕は「共生」についてなど、今まで論文にしたことを話した。しかし、単に言葉を羅列しているだけで、何も語っていないように自分で感じた。なんて無力な言葉の群れなのか、彼女には何も通じていない、そう思った。そして、彼女から聞いた、子どもへ託す思いを中心にまとめるつもりだという話もした。彼女はそれを見せてと言った。それを見てから、もう一度決めたいと考えを変えてくれた。彼女は、最初に僕にはつきり」と拒否「しょうと来たのだと言った。しかし、話を聞くうちに、もう一度話を聞こうと変わったと話した。

「宮内くん、なに焦っているの？」

彼女は言った。

そして、彼女はこう続けた。一年間会ってきて、宮内くんはもっと優しいんじゃないじゃなかった。これじゃ、まるでカルテみたいじゃない。こんなに冷たい文章を母く人だとは思わなかった。宮内くんなら、もっと優しいものになるんじゃないの、私は文章力がないから優しいってどんなのと聞かれても答えられないし書けないけど。もっとゆっくりに時間をかけてつくってほしいよ。その方が、お互いにとって良いものができるじゃない。彼女のそのような話を聞いて、僕は涙が止まらなかつた。焦っているのは事実だった。自分の焦燥感に押し潰されそうになっていた。ある人にも同じようなことを言われた。涙が零れたのは、自分のことのみならず、僕のことを本当に考えてくれていることがよくわかつたからだ。彼女の言う通り、時間をかけてゆっくりに書き上げたかつた。しかし、僕には時間がほとんど残されてはいなかつた。学内の事情、僕の置かれてる立場を包み隠さず話した。彼女は、前には忙しくて時間が取れないと話していた。しかし、時間は必ずつくるから連絡して、見せてと彼女は何度も言ってくれた。僕は彼女と今まで何を話してきたのだろうか。

(中略) 彼女の予てもが、泣く僕を不思議そうに見ていた。オモ二がいじめているように彼の目には映って

いるらしかった。

1993年11月21日(日) 16:15-18:45 (記述は翌日11月22日)<sup>(6)</sup>

いまとなつては、記述した当事者である私でさえナルシシズムが多少鼻につく箇所があるが、そのときのそのままの文章をあえて掲載することにした。

この出来事の後、私はどうしたのか。簡潔に述べると、私は第二の修士論文を自らで封印し、限られた残された時間で第三の修士論文を書き上げた。生活史をより深く解釈するために記述してきたフィールドノーツをもう一度読み直し、一つのエスノグラフィーとして書き直した(宮内一九九三)<sup>(7)</sup>。より具体的に述べれば、「在日朝鮮人」女性を中心とした朝鮮の伝統楽器の演奏グループに参加し、私はメンバーの一人として様々な場所で演奏を行ないながら、日常生活の文脈における「共生」の営為を蓄積してきた。この共有された時間・空間における文化の衝突や継承といった文化をめぐる諸個人の変容を伴ったダイナミックな営為をエスノグラフィーとして描くことを通して、現代の日本社会における「共生」の意味とその可能性を生活世界の側からの考察を行なったのだ。松田論文に習えば、セルフ(8)を中心としたエスノグラフィーとも言えるかもしれない(松田二〇〇三)。この当時、現在は浜松の地域社会と定住外国人に関する地道な調査で知られる池上重弘さん(池上編二〇〇一など)と一緒にバルトなどのエスニシティに関する基本文献(Bath 1969など)を読んでいたことにとっても影響されていたことは確かであろう。このような体験の中で、結果として、私は三つの修士論文を書き上げた。この珍しいと思われる経験を通して、社会調査やフィールドワークをするという点、そしてそこで得られた知見を書くということに関して、当時は「ライティング・カルチャー」(Writing Culture)<sup>(8)</sup>なる書物(Cliford & Marcus 1986)がこの世に出版されてショックを与え続けていることすら知らない私は、

自らの体験を通して、きわめて素材に「調査とはいかなる行為か」ということを考え続けることとなった。このことは本書全体の支えとなつてゐるし、他の社会調査やフィールドワークに関する書物と異なる点があるとするならば、上記のような体験と経験に基づいてゐると思われ<sup>9)</sup>る。

〔注〕

(1) 日本国内においては、フィールドワークのバイブルとも言える『フィールドワーク』(佐藤一九九二)では以下のようにいつたん定義されている。

「(前略)『フィールドワーク』とは、参与観察とよばれる手法を使った調査を代表とするような、調べようとする出来事が起きているその『現場』(＝フィールド)に身をおいて調査を行う時の作業(＝ワーク)一般をさすと考えていいでしょう。」(佐藤一九九二、三〇頁)

(2) 私は、総称としては「在日朝鮮人」という呼称を用いている。なぜこの呼称を用いるのか、そして呼称にまつわる問題に関しては、本書第二章を参照していただきたい(初出は宮内一九九九)。

(3) 前述の「フィールドワーク」において、「厚い記述」とは、「カメラのような機械とは違い、フィールドワーカーは見たままの姿を記録するだけではなく、その奥に幾重にも折り重なつた生活と行為の文脈をときほぐしていき」、「その作業を通じてはじめて明らかになる行為の意味を解釈して読みとり、その解釈を書きとめていく作業」(佐藤一九九二、九二―九三頁)とされている。

(4) このフィールドノーツを書いていた当時は、「彼女」という表現を用いていた。三人称複数も「彼ら」という表現を用いていた。しかし、様々な出会いから、「彼ら」という表現が感覚的に合わなくなり、「彼／彼女たち」から「彼／かの女たち」へと表現を変えていった。本書執筆時点では、「かれ／かのじよたち」という表現を用いている。すべてひらがなのために読みづらいかもしれないが、いまはこのような表現しかできないでいる。本書の第一章と第三章と第五章は、本書のために新たに書かれたものである。だから、三人称複数の表現は、すべて「かれ／かのじよたち」で統一されている。同時に、三人称単数の表現も、「かれ」あるいは「かのじよ」で統一されている。しかし、第二章と第四章は過去に学会誌に掲載されたものであるので、表現も現在の表現とは異なつてゐる。さらに、一人称単数の表現も、「筆者」となつており、他の章のように

「私」ではない。第二章で述べられているように、後から表現だけを修正していくことに対して、私はかなり抵抗がある。その当時の文脈を妙なかたちに變形させてしまわないために、その部分については修正しないままで掲載させていただいた。結果として、読みづらくなってしまったかもしれないが、ご勘弁いただきたい。

(5) 口琴の一種である、アイヌ文化における伝統楽器の呼称。

(6) このフィールドノーツに関しては、途中略したり、固有名詞を修正した箇所があるが、基本的に当時の記述そのままである。ただし、Aさんのプライベートに関する私と私が判断した箇所は掲載を見合わせた。さらに、フィールドノーツの原本においては、本書での「Aさん」は本名の頭文字のアルファベットを用いて「○さん」と記述している。このように記述していたのは、万が一、フィールドノーツを紛失したことを恐れたためである。本書掲載にあたって、さらに機械的に「Aさん」と修正した。

(7) この修士論文はこれまで活字にはしていない。だが、このフィールドワークのプロセスでの自らの変容を主題に、話題提供者としてお声をかけていただき、お話をさせていただいたことがある。二〇〇一年三月二十九日に鳴門教育大学で開催された日本発達心理学会第一二回大会上のラウンドテーブル「生成される文化を生き、語り、思索することについて—アジアという多様性の中で」のことである。このラウンドテーブルの企画主旨を引用しておこう。

「私たちはどのように生の文脈を語ることができるのか」という問いに始まり、単純に「文化」を研究対象として客体化することで解決されることはないという認識に基づいている。「日本人」という閉じた系を越え、アジアという多様性の中で対話することで、互いの内に新しい文化が生成するような場を目指して開かれた革新的な心理学の試みである。」

このラウンドテーブルは、もともと「eentaku 電子円卓会議」というメーリングリスト上で交わされた議論に基づいている（そして、私はこのメーリングリストでのやり取りから国境を越えたフィールド心理学の息吹を胸一杯吸い込んだ）。このメーリングリストは、「こはアジア地域（もちろん日本も含む）などのフィールド研究に関心の高い心理学研究者が集う場です。角のない「円卓」の特徴を活かして、楽しく議論しましょう！」という主旨のもと、二〇〇〇年につくられたユニークな一つのメディアである（この成果は、山本・伊藤一〇〇四、同二〇〇五などで結実している）。このような報告の機会を与えてくださった、このラウンドテーブルの実質的な企画者であり、先の「eentaku 電子円卓会議」の主催者・管理人のお一人である山本登志哉さんに心から感謝したい。

(8) 「ライティング・カルチャー・ショック」ということばさえある。文化人類学の領域では「もはや何も書けない」というイ



ンバクトがあつたとされる。そのショック後の多様な新たな試みに注意する必要があるだろう（詳細は太田二〇〇三）。

(9) 「体験」と「経験」については、ある一定の区分が必要であろう。筆者による推測な定義づけよりも、以下の記述を引用しておきたい。

「体験とはただ生起する史実を通り抜ける (fahren) ことであるが、経験する (erleben) とは、自らが体験したことから、痛みをとまなう形で（なぜなら自己の解体に直面するから）自らを切り刻み (analysieren)、ことごとくの中に自己を埋め込みかつそこから切り離すという道程である。」（新原一九九五、二七五頁）

### 【文献】

池上重弘（編）二〇〇一「ブラジル人と国際化する地域社会―居住・教育・医療」明石書店

太田好信 二〇〇三「解説 批判人類学の系譜」、クリフォード、J.（著）太田好信ほか（訳）「文化の豹状―二十世紀の民族誌、文学、芸術」人文書院、五一五―五三三頁

佐藤郁哉 一九九二「フィールドワーク」新曜社

中野卓 一九七七「口述の生活史―或る女の愛と呪いの日本近代」御茶の水書房

新原道信 一九九五「移動民」の都市社会学―方法としての旅―をつらねて」、奥田道大（編）「21世紀の都市社会学2」コミュニティとエスニシティ」勁草書房、一六―一八九頁

松田素二 二〇〇三「フィールド調査法の豹状を超えて」、『社会学評論』第五三卷四号、四九九―五一五頁

宮内洋 一九九三「相互（異化）のネットワーキングと「共生」（修士論文、未公表）

宮内洋 一九九九「私はあなたの方のことをどのように呼べば良いのだろうか？ 在日韓国・朝鮮人？ 在日コリアン？ それとも？―日本のエスニシティ研究における（呼称）をめぐるアポリア」、在日朝鮮人研究会（編）「コリアン・マイノリティ研究」第三号、五―二八頁、新幹社（本書第二章に収録）

山本登志哉・伊藤哲司（編）二〇〇四「現代のエスプリー特集：現実立ち向かう心理学」四四九号、至文堂

山本登志哉・伊藤哲司（編）二〇〇五「アジア映画をアジアの人々と愉しむ―円卓シネマが紡ぎだす新しい対話の世界」北大路書房

Barth, F. (ed.), 1969, *Ethnic Groups and Boundaries*. Little Brown and Company.

- Clifford, J. & Marcus, G. E. (eds.), 1986, *Writing Culture: the Poetics and Politics of Ethnography*. University of California Press. (※  
田代耕三ほか(訳)一九九六『文化を述べて』紀伊國屋書店)
- Geertz, C., 1973, *The Interpretation of Cultures*. Basic Books.

# 体験と経験のフィールドワーク

## ●目次

はじめに iii

### 第一章 「社会調査」という違和感 1

はじめに 3

はじめての社会調査 3

講座による社会調査 7

社会調査からフィールドワークへ 12

おわりに 16

サイドストーリー① 「あいづら」から「Y君」へ、そして…… 23

### 第二章 フィールドでの出会い

はじめに 27

——私はあなた方のことをどのように呼べば良いのだろうか?—— 25

日本のエスニシティ研究における “出会い” 30

“出会い” 以前の問題 32

“出会い” 以後の問題 38

おわりに 42

サイドストーリー② 聞き取る体験 55

第三章 フィールドでの恋愛 57

はじめに 59

恋愛とは 62

社会調査やフィールドワークにおける恋愛の可能性 67

おわりに 70

サイドストーリー③ 高見から見る 73

第四章 〈出来事〉の生成

——幼児同士の「トラブル」に見る説明の妥当性について—— 75

はじめに 77

肉眼がとらえた〈出来事〉 79

録音・録画された〈出来事〉 83

男児の母親の語りから浮かび上がってきた〈出来事〉 102

おわりに 105

サイドストーリー④ 無欲の厚い記述 113

第五章 フィールドワーカーと時間 117

はじめに 119

渡邊・佐藤論文における「視点」の問題 120

フィールドワークにおける「視点」の問題 122

渡邊・佐藤論文における「時間」の問題 124

フィールドワークにおける「時間」の問題 126

フロアからの質問 128

おわりに 133

索引

あとがき